
アンドラハルの魔王

J . I . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンドラハルの魔王

【Zコード】

N6103Z

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明がまだ未発達な異世界。天空城にて最終決戦を控え、勇者の仲間達は千里眼ですべてを見てきた妖精を中心に過去を振り返る。

ヒローグ 天空城にて

五一三年、天空城がまだアーティナルの空を飛んでいた時代。王の間を目前にして、廊下に座り込みをする者達がいた。

お互いに顔を見ようともせず、ただ黙つて時が来るのを待つていた。

剣豪サーディ・ドノヴァンはいらついた様子で、さきほどから剣の鍔をもてあそんでいた。

王の間で戦いが始まれば、すぐにでも飛び込むつもりだった。

「どうとづ、この時が来ちまつたな……」

「ああ……」

彼の声に応えたのはアッカ、西部のバーリヤ平原からやつてきた狼族の戦士だ。

人前では帽子を田深に被つて獣の耳を隠しているが、ときおり口の端をつり上げて異様に発達した犬歯を見せる癖がある。魔法は使えない。

「この戦いで全てが終わる。魔界が滅びるか、人界が滅びるか
しかし、本当にこれで全てが終わるのか？」

口を挟んだのは賢者オルフェウスだった。

卓越した魔法の使い手だが、この中で最も若年と言つて過言ではない。体に合わない大きな魔法の杖を抱え、常に最大の力が出せるよう、魔力を温存している。

「僕にはとてもそは思えないんだが……」

「オルフェウス、迷つてはいけないわ」

女剣士イーラは落ち着いて彼を諫めた。

普通の男性よりも体躯の大きな彼女は、サージよりも大きな超巨剣の使い手だ。剣と呼ぶのも憚れる建物の柱のような武器を、今は椅子代わりにしている。

「田の前にこの城の主が居る、この城はイーサファルトを田指して、今もなお人界の上空を飛びつづけている。このまま行けば間違いなく戦争になる、私たちはそれを阻止しなければならない。いま私たちが考えていいのは、ただそれだけよ」

「分かつちや居るけどさ……」

「あ……あ……あの……みな……みな……さん……」

おどおどしながら、よつやく声を挟む」とができたのは尼僧のサーラだ。

ゆつたりした西部の民族衣装を着ていて、髪飾りを頭が重くなりそうなほどたくさんつけている。彼女は治癒の力を司る水の精霊ゼテンを信仰しており、多少ではあるが治癒魔法が使えた。

「わた……しは……その……あの……ひと……が……まさか……あの……ひと……だつて……たくさん……助けて……くれたし……わたくし……魔法……へた……だけど……あのひと……上手……なんで……なんで……あのひと……今は……敵……よく……よく……わからなくて……」

サーラはうまく言葉に出来なかつたらしく、結局黙つてしまつた。沈黙を破るように、アッカは言つた。

「ゲールハーツが言つたことには……」
「やめるんだ、アッカ！」

サーージは立ち上がりつて彼を怒鳴りつけた。サーラは泣きそうになつて耳をふさいだ。

「もう死んだ奴の事をいちいち気にするな！ あいつは死んだ、これからこのパーティがどの道をたどるかは、残された俺たちが決めることだ！ ミコン！ ……おい、ミコン！」

ただひとり、知らない顔をして窓の外を眺めていた女性が居た。森の管理者サテモのミコン＝アシュケンだ。彼女のとがった耳は遙か遠くの出来事を聞き、目の前の出来事のように知ることが出来る、《良き耳》と呼ばれる耳だ。

「お前なら、何か知ってるはずだな！ ……お願いだ、教えてくれ、あいつは、本当に魔王だったのか……！ どうして俺たちを助けたんだ……！ ただ味方のふりをして俺たちに取り入つて、体よく利用していただけだったのか……！」

ミコンは、長い耳をぴくぴくと動かして、困ったように首をかしげた。

「その質問に答えるのは難しいわ」

「そんな筈はないだろ？ ……！ お前は全てを見て知っているはずだ！」

「サーージ、私にはこの戦いそのものが複雑すぎてわからないの。一体誰が魔王で、誰が勇者だったのか。私には魔王は何人もいたような気がするし、勇者だって何人もいたような気がするわ。そもそも魔王とは何なの？ 勇者とは何なの？」

ミコンの回答に、一同は息を呑んだ。サーージはむしろ怒りさえし

た。

「ふざけんな……！ 決まっている、魔族の王が魔王！ 魔族を束ねる者だ！ そして人間に害悪をなすそいつを征伐する代表が勇者だ、お前はそれを今まで知らずに戦つてたのかよ……！」

憤慨する彼に対し、どうして怒りを買つてしまつたのか、とう複雑な面持ちをするミコンに、オルフェウスは優しく諭した。

「ミコン……今の私たちに必要なのは、サテモの哲学的な話じゃないんだ。彼が我々の敵だったのか、味方だったのかという、すぐ単純な話だ」

「敵だったかもしれないし、味方だったかもしません。どちらにもなれたかもしれないし……最初からそうなるように決まつていたのかもしれない。……結果として彼は魔王で、彼女は勇者になつてしまつたわけですが」

ミコンの不思議な回答に、とうとうオルフェウスも困惑するような顔つきになつてしまつた。

答えがいつこうに手に入らず、いつたゞつしたものかと顔を見合わせる英雄達の間で、ミコンはふんと息を漏らした。

「単純に言ひ表すには、この戦いは複雑すぎるようですね……なら、順を追つて話しましよう、私たちと巡り会つより少し前の、『魔王ミコシヤ』と『勇者エーサ』について」

勇者Hーサ

一年前、イーサファルト王国、ホルヘ高原、公爵の城。

ゲールハーツは頬をしきりにかいていた。目の前に少女が居る。黒髪に黒い瞳、体は男物の鎧を着こなせるほど大きい、しかし、肌は触ると溶けそうなほど白い。

この少女に、勇者にふさわしい剣の手ほどきをするのが彼の役割である。

「Hーサさま、そう何度も何度もお城を抜け出されてしまう……ぐぐー公にお役目を仰せつかつた私どもを困らせないでください

い」

少女は、つーんとそっぽを向いた。

「礼儀作法の授業にはちゃんと出でおりまする」

「それで礼儀作法が身についていないのではお話にならないではありますんか」しかも語尾が微妙に変だ。

「失敬な、国語の授業にも、教養の授業にも、魔法の授業にも、ちゃんと出でおりまする」

「ちゃんと出でていない私の授業だけですか……」

ゲールハーツはふるふると拳をふるわせた。いつたゞういう意味だ。

教える立場の彼も年のこなせとほど少女と変わらないので、ひとつすると彼だけ舐められているのかもしれない。

ゲールハーツはまだ二十代前半の青年である。七年前に元服し、

アルト公爵に仕える一介の正騎士という身分になつた。

今まで何人か新人の剣術指南を受け持つたことはあるが、彼女には優秀な新人になくてはならない「やる気」がない。

まるで精神修養のために嫌々騎士にさせられた貴族のぼっちゃんさながら、やらされている感が見え透いていた。アーディナル中部では伝統的に若い頃に騎士見習いをする家系が多く、ゲールハーツもそういう新人を受け持つたことがある。

「エーサさま、あなたは『自分がいつたい何者であるか』という自覚が足りません。あなたは何者ですか？」

「我が名はエーサ！　ドラゴン・ライダーの赤い星に導かれ、異世界より現れた勇者だ！　アンドラハルの魔王を討伐し、この世に更なる光をもたらす救国の英雄である！」

「英雄である！（キリッ、じゃありません。それでは用意された台詞をただなぞつているだけではありませんか！　そうではあります、『自分の言葉でおっしゃってください、あなたは何者ですか？』」

「我が名はエーサ！……」

反射的に言つてしまつたエーサは、はつとしてしばらく固まつていた。どうやら続く言葉がでなかつたらしく、ふいに涙目になつた。

「……ううう、だつて、これを覚えなければ『飯が食べられなかつたんあります……』

はつ、そうか、授業をサボつたら、『飯ぬきにすればいいのかとゲールハーツは一瞬感心してしまつたが、相手は救国の勇者だ、一介の家庭教師に『飯抜きなど』という強権が発動できるはずもない。ここはあえなく断念した。

しかし……驚くべき記憶力だ。

ドラゴン・ライダーの赤い星が最後に出現し、北の遺跡で彼女が

発見されたのがつい三ヶ月前。ヘグニ公爵によれば、そのとき勇者はこの世界の言葉をまるで話せなかつたといつ。

伝説の勇者を見つけたことを、王にはすでに報告してしまつた……なんとか王に会わせられるぐらいたには教養をたたき込まねば、といつことで彼らが家庭教師として公爵領に招かれ、朝から晩までみつちり徹底的に教育を施しているのである。

この短期間で言語は不自由ないくらい習得してしまつたし、これだけの長台詞をすらすらと暗記してしまつたのはさすがだ。魔法使いに向いているかもしけない、きっと呪文を覚えるのも容易だらう。

「ゲールハーツ、もし王からやつていう質問があつたら、私はどうすればいいのでありますか？」

「素直におつしゃつたらどうです？ 元いた世界の事でも「私は元居た世界の記憶を忘れてしまつたのであります……なにも覚えていない、気がついたら遺跡に倒れていた……」

エーサの声は、すこし震えていた。

「私はどうすればいいのでありますか？ 本當は自分が何者で、どこから来たのか、本当に勇者であるかどうかも分からぬのであります……」

ゲールハーツは、エーサの肩をがつしと掴んだ。

薄い灰色の瞳を持つ彼が生涯見たこともない、漆黒の瞳をまつすぐ見ると、まるで瞳の中に吸い込まれそうだった。

「エーサさま、あなたは勇者です。そして我々の希望です。……我々にはあなたをお守りする義務がある、そしてあなたにはその献身に報いる義務がある、それが信頼というものです」

「わたくしには良くわからないであります……」

「分からなくても結構です。授業をお休みになるときは、遠慮なさらずに私におっしゃってください。急にいなくなつて、下々の者達をむやみに不安にさせることだけは、おやめになつてください、それは勇者のすることではないかもしれません。あなたは我々の希望なのですから。いいですね？」

脣をとがらせたり、きゅっと結んだり、Hーサの心の中は色々と忙しそうだった。

よつやく、おかるおかると囁つた風に声を出した。

「ゲールハーツ……今日は休んじゃダメ?」

「今日はもうお疲れですか?」

「うん、これから薬草摘みに行くのであります」

「いいでしょ。あまり遠くへ行かないよう。それと基礎練（素振り三千回、ダッシュ五干回、腹筋背筋一千回）だけでもやっていくつてくださいね」

「やつてられるかー！」

Hーサはついかつとなつて鋭いまわし蹴りを放つた。彼女は鎧を身にまといており、脛にまともに当たつた威力は強烈だつた。ゲールハーツが悶えている間に、勇者はその場から逃げ出した。

「きよ、今日は用事があるから休むのでありますーー。これにてーー。」

「ま、待つてくださいー。『伝説の勇者様』には軽いメニューでしょ?……? 一体、どうしてそんなに嫌がるんですか?……ーー。」

ゲールハーツの中の勇者基準は、とてもなく高かつた。それがエーサにとつて重荷だったのは言つまでもないが、それだけエーサは期待されていたということだ。

それが『勇者エーサ』だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6103z/>

アンドラハルの魔王

2011年12月20日15時50分発行